独居死の部屋には夫との写真が散乱

孤独、疎外感――これは、ひとりになった女性にとって、お金や住む場所以上に切実な問題のようだ。

前出の松原さんが主宰するNPOには既婚者も所属しているが、夫を亡くしてから精神的なバランスを崩す人が多いという。

「所属するところがない不安感というか、〝夫がいる〟ということで安心し、シングルになった老後を描けていなかったのでしょう。なので、ガタガタッときてしまうようです」

そうならないためにはあらかじめ「ひとりでいることに慣れて耐性をあげておく」（前出・上野さん）か、あるいは、家族に代わる気を許せる誰かをつくっておかなければいけない。

ひとりでいることへの耐性もなく友人関係の構築ができず、家族や親戚との距離が埋められずに、誰にも看取られることなく、失意の中で亡くなっていく人もいる。

日本初の遺品整理会社『キーパーズ』の代表取締役・吉田太一さんはそんな高齢者の最期を数多く見てきた。

「うちで扱う遺品整理の場合、95％が単身者。そのうちの半数がお部屋で亡くなる単独死です。死後3、4日経って見つかるケースもあり、整理は困難を極めることも多いのです」

先日、吉田さんが遺品整理に出かけたのは、50代の女性の部屋。彼女は自殺だったという。

部屋を整理していて出てきたのは、いくつもの小さな骨壺。彼女の〝家族〟だったペットの骨だったという。

「独身の女性、もしくは結婚したけれど子供はなく、夫が先に亡くなったというケースでは、**ペットかお酒に依存している女性が非常に多い。ストレスや不安の行き先が見つけられず、何かに依存してしまうんでしょう**」

死後1か月近く経って発見された40代の女性は、酒びたりの生活だったという。整理を依頼してきたのは、親戚だ。

5年前に夫を亡くした彼女は、それ以来、ひとりマンションで暮らしていた。

夫が亡くなってからは、酒に溺れる生活で、何度も隣人や親戚とトラブルを起こしていたという。警察沙汰になることもしばしば。親戚とも疎遠になっていた。

吉田さんが彼女の部屋に出向き、そこで目にしたのはたくさんの写真立て。〝酒びたりで警察沙汰〟という話とはそぐわない、仲睦まじそうな夫婦の姿がそこにあった。

それは、彼女が最愛の夫と旅した、世界各地で撮影された写真の数々だった。部屋一面に飾り付けられ、床にも散らばっていた。旅先で買ったであろうアクセサリーやジュエリーと一緒に・・・・。

「決して豪華な旅というわけではないけれど、幸せそうな写真。それとは対照的な、荒れ放題の部屋が印象的でした。

部屋が極端に荒れて、整理された状態を、維持できなくなったところで、人は人間関係も維持できなくなっていくような気がします」（吉田さん）

遺品整理会社『キーパーズ』が扱った独居高齢者の自宅。ものが散乱し、あらゆるものをため込んでしまうような事例が多いという。

努力しなければ友達はできない

都内で民生委員をしている山本幸子さん（40才・仮名）の携帯電話には、週に何度か数名の〝おひとりさま〟から電話がはいる。

民生委員として、独居高齢者の家を回っているうちに、交流の始まった人たちだ。

強い雨が降った日などは、携帯電話が鳴りやまないほど、あちこちから電話がかかってくる。

いつもは元気なおばあちゃんたちも、この日ばかりは違った。

「雷が怖いわ」

「床下浸水になるんじゃないかと心配で心配で・・・・」

「後でうちに来られない？」

高齢者、とりわけ後期に進むほど〝おひとりさま〟は悪天候でさえ、不安でたまらなくなるのだと山本さんはいう。

「〝この程度なら大丈夫よ〟と答えて、後でちょっと顔を出すだけで、安心するみたいなんですが・・・・。

体力があって若さがあって、他の家族が家にいる私たちにはわからない、独居のお年寄りならではの不安があるんだな、と思います」

そんな不安を解消するのは、お金でも住みかでもなく、やはり〝人〟でしかないのだ。

前出の松原さんは、老後を考えたとき、最低でも2、3人の友人は必要だという。

「単にショッピングに行ったり、食事をしたりという友達ではなく、もう一歩踏み込んで、いろいろ話し合えて、わ